

「青猫」の世界

三 木 サ ニ ア

一

萩原朔太郎の第二詩集「青猫」（大正一二年一月刊）は、永遠の浪漫主義者朔太郎の、生のイデヤへの郷愁から生まれた音楽性豊かな抒情詩集である。作者はこの詩集のポエジーの本質を「遠い実在への郷愁」と規定し、彼のいわゆる「音楽」も、この永遠のノスタルジャに他ならないと考えた⁽¹⁾。而して、「青猫」のモチーフは、神と愛から離反した孤独な実存としての近代人の哀傷^{ペイソス}であり、憂鬱、倦怠、虚無^{ニヒル}的な気分、情調が、その全体的形象をうす青く掩っていた。このような「青猫」の詩的世界はそのイデヤ思慕において、人間の普遍的根源的な形而上的志向性に基づくとともに、暗鬱な情緒の色調は、近代的自我の特質を帯びており、その普遍性と時代性の上に作者の個性が開花結実したのである。

本稿は、イデヤ思慕を中心とする「青猫」のロマンチズムの内部構造の特質を、作者の詩論と作品を対照させながら究明したものである。

註(1) 「青猫」序に、「その笛の音こそは『艶めかしき形而上学』である。その笛の音こそはプラトオのエロス——靈魂の實在にかがれる羽ばたき——である、そしてげにそのみが私の所謂『音楽』である」とある。

二

かつて「月に吠える犬」の表象によって、魂の永遠の飢渴感⁽⁴⁾（形而上的飢渴感）をイメージスチックな詩的ヴィジョンに結実させた朔太郎は、「青猫」序において、ポエジーの本質を魂の永遠のノスタルジャであると規定し、それを「春の夜に聴く横笛の音」あるいは「燈火の周囲にむらがる蛾」の運命にたとえた。

かくて私は詩をつくる。灯火の周囲にむらがる蛾のやうに、ある花やかにしてふしぎな情緒の幻像にあざむかれ、そが見えざる實在の本質に触れようとして、むなしくかすて、らの脆い翼をばたばたさせる。私はあはれな空想児、かなしい蛾虫の運命である。（「青猫」序）

浪漫詩人は、いつの世にも充たされぬ現実のはるか彼方にイデアの世界をゆめみて「故しらぬ思慕の哀傷⁽⁵⁾」に涙する。それは作者が強く傾倒し、少なからぬ影響を被った欧米の近代詩人、E・A・ポーにおいても同様であつた。

はるか彼方になにかがあつて、彼はまだそこまで達し得ないでいるのだ。われわれはなほ癒し難い渴望があり、彼はそれを鎮めるための清澄な泉を示してはくれないのだ。この渴望は人間の不滅に由来している。人間が永久に存在することの結果でもありしるしでもある。それは星を求める蛾の願いである。（「詩の原理」E・A・ポー著、国土社、七五頁）

この世を超えたはるか彼方になにかがある、と直感する永遠の感覚、その形而上的志向性において両者には、ある相関性が見出される。比喩的表象としての「蛾」のイメージも単なる偶然的的一致とは思えない。しかし、靈魂の不滅と人

間存在の永遠性を信じる欧米キリスト教的精神風土から生まれ出たポーと汎神論的、虚無的な日本の精神風土に生きた朔太郎とは、そのイデオラ志向において質的な相違が認められる。ポーの上記の詩論は、むしろ西欧の現代哲学者J・マリタンの次のことばが、より近い位相にあるといえよう。

詩は、精神とそれ自身言いあらはすことのできない實在、および、その源泉との接触による実りである。この源泉こそ、私は神自身あると考える。(「詩とは何か」 J・マリタン R・マリタン 共著、南窓社、三三頁)

ポーのいう「はるか彼方」のなにものかと、J・マリタンの「實在とその源泉」は、いずれも形而上的な永遠の實在と、それへの接触を意味するものであろうが、彼ら欧米の詩人、哲学者の「無限」に対する形而上的な實在感覚と、朔太郎の「イデア」への實在感覚とは根本的な相違が存するように思われる。

朔太郎の詩論における「永遠の實在」ないし「イデア」は、プラトン、ソクラテス等のギリシヤ哲学概念からの借用と考えられるが、客観的存在ではなく、あくまでも主観を中心とする仮象的存在であり、彼の詩論の中心におかれるものは、イデアに向かう主観であった。

- (1) 「主観」とは「観念」であって、自我の情意が欲求する最高のもの、そのみが真実であり、實在である所の、規範される自我である。(「詩の原理」三七頁)
- (2) 芸術のイデアは、真の具象的のものであるから(中略)むしろ VISION とか「思ひ」とかいふ語に当ってゐる。そして尚一層適切には「夢」といふ語が当ってゐる。(同書四三頁)
- (3) 思ふに彼等の求めたものは、いかなる現實に於てす充足される望みのない、或るプラント的イデア―魂の永遠なる故郷―へのものすたるぢやで、思慕の夢みる實在であつたろう。思ふにかうしたイデアは、多くの詩人に共通する本質のもの、詩的靈魂の本源のものであるかも知れない。なぜなら古来多くの詩人が歌ったところは、究極に於ては或る一つの、いかにしても欲情の充たされない、生の胸底に響く孤独感を訴へるから。(同書四五頁)

このような「イデヤ観」に対し、三好豊一郎氏は次のように述べておられる。

朔太郎の形而上的希求、イデヤへの郷愁は（中略）本質的には疎外された生活者、生活なき生活者の孤独からの発想、魂の安息を導き容れうる生活の郷愁にとどまるのである。実生活者としての欠落の意識が、実に生活者をとび越して、生の觀念（イデヤ）へ彼を追いつ立てるのである。（『自然主義と象徵主義』思潮社、萩原朔太郎研究、二七〇頁）

浪漫主義を「或る漠然とした、名目なきイデヤへのあこがれ」であると規定した⁽⁴⁾朔太郎にとって、「イデヤ」はそのロマンチックな主観の「かげ」ないしは幻影の如き虚像的存在であった。

さて、このようなイデヤ思慕をポエジーの本質とする「青猫」の表象は、内面的集中性の強い作者の詩的想像力によつて生み出された形象性豊かな幻影、夢にみちあふれ、那珂太郎氏の適切な評語⁽⁵⁾のまに、「柔軟、曲線的、エロチックなまでのムウドを漂わせて肉付豊かにふへらんだ」のである。

ここで「青猫」におけるイデヤ思慕の諸形象を対象別に分類すると、次のように整理できる。

- 1、遠い実在（幸福のかげ）を求めて―遠心的イデヤ志向
- 2、都会の幻影を永めて―遠心的イデヤ志向
- 3、原始的情緒への先験的憧れ（楽園復帰への潜在意識的願望）―求心的イデヤ志向
- 4、愛のイデヤの思慕（「永遠の女性」思慕と、エロチスムへの魅惑）―求心的イデヤ志向
- 5、死のイデヤへの希求（「美しき死」涅槃への憧れと、存在の崩壊、消滅への希求、超現実的世界への逃避行―求心的、遠心的イデヤ志向

以上の分類は便宜上試みたもので、実際は、これらの多様な思慕^{ユコス}、郷愁^{ノスタルジア}、魅惑が融合し、又それらと背反對立するネガティヴな志向、感情（嫌悪、憎悪、恐怖等）が有機的にからみ合い、渾然一体となって、起伏にみちた漂渺た

る情緒の調べを奏でているところに、音楽的象徴詩集としての「青猫」の本質的特色が求められるのであろう。

註(1) 近代文学鑑賞講座、第十五巻、萩原朔太郎、六六頁、那珂太郎

(2) 「青猫」序

(3) 詩の原理、四六頁

(4) 那珂太郎前掲書(1)六七頁

三

現実のはるか彼方にさだかならぬ「遠い遠い実在⁽¹⁾」を求めて、「故しらぬ思慕の哀傷⁽²⁾」に涙する遠心的イデヤ志向の郷愁的詩情は、「青猫」初期のポエジーの基調となっている。詩集の冒頭部を飾る「幻の寝台」の章中の「沖を眺望する」は、「蝶を夢む⁽³⁾」に収録された「青空に飛び行く」「冬の海の光を感ず」とともに、雑誌「感情」に発表された類想詩篇であり、海のはるか彼方に「幸福のかげ」を求めて眺望する浪漫的感情が、穏やかでうねりのあるリズムに乗って波のように展開される。

沖を眺望する

この海岸には草も生えない
なんといふさびしい海岸だ
かうしてしづかに浪を見てゐると
浪の上に浪がかさなり
浪の上に白い夕方がうかんでくるやうだ

ただひとり出でて磯馴れ松の木をながめ
空にうかべる島と船とをながめ
私はながく手足をのばして寝ころんでゐる
ながく呼べどもかへらざる幸福のかげをもとめ
沖に向つて眺望する。

「草も生えない」さびしい海岸は、主体の空漠たる心象風景であろう。現実的生の空虚と寂莫は、現実の彼方に超現実のイデヤを夢みさせるが、その隱喩として浪の上の白い夕月が示される。

しかし、冒險的浪漫主義者ならぬ怠惰な「青猫」的ロマチスト朔太郎⁽⁴⁾には、海の彼方の「幸福のかげ」を求めて自ら波の上にのり出して行く積極的行動性は求められない。ただはかない期待とあこがれに胸をふくらませながら、「幸福のかげ」を求めて眺望する。この「かが」は、現実（実体）に対応する虚像的存在として、「青猫」的世界觀の基本的な表象となっている。

彼等（注、主觀主義者）にとって、実に「有り^レ」と言はれるのはイデヤのみ、他は虚妄、影の影にすぎないからだ。（「詩の原理」三七頁）

と断じた朔太郎にとって、「幸福」は、もともと實在の「かが」に過ぎない。「あるべきもの」イデヤとして、遙か彼方に「眺望」される存在であったのだ。

「冬の海の光を感じず」でも、デリケートで傷つきやすい詩人の孤独な魂は、遠くに冬の海の「光」（幸福のイデヤ）を感じ、ことはできても、「孤独でなつかしい純銀の鈴」（純粹でリリカルなイデヤ思慕の情の比喩）の美しい音色をひびかせるのみであり、主体の靜觀的、受動的姿勢はくずされない。

「青空に飛び行く」においても同様である。「願に帆をあげて行く舟のやう」に積極的に幸福を追い求めるのは「かれ」であって、「私」は決して自ら前進しようとはしない。むしろ、「私は私のちひさな幸福に涙がながれる」という靜觀的なナルシズムに安住の地を求める。「ああかくして、一羽の鳥は青空に飛び行くなり。」この一羽の鳥は、幸福を求めて飛び立つ「かれ」の表象であるとともに、現実に決して止まることのない「イデヤ」を示唆するものであろう。

遠い彼方に「幸福のかげ」を求め、生の此岸からそれを「眺める」という基本的姿勢こそ、朔太郎の浪漫主義的生の特色であろう。「独逸浪漫派の美学⁶⁾」によれば、浪漫主義者の特性である「内面的集中性」とは、空想、情趣、理想の世界に特に生活の中心を置こうとする精神的傾向であり、精神の働きが自己の内部に向ひ過ぎる結果として、外界の正しい認識や外界に向かう活動力、理想実現への努力等における無気力、欠陥を生じ、「懶惰」「無為」「遊閑」という妙諦を会得するにいたり、ひいては一種の虚物主義的思想に発展する傾向にあるといわれる。これらの詩篇は「青猫」期における詩人朔太郎の内面的集中性から生み出された浪漫的生の心象風景ではなからうか。

註(1)・(2) 「青猫」序

- (3) 朔太郎の第三詩集で、「月に吠える」及び「青猫」の拾遺詩集になっている。その前篇は「青猫」期の外品なので、本論ではこれらも合せ論じる、この三篇は、大正六年二月に発表されたもの。
- (4) 朔太郎は「ロマンチストの二種類」(全集第四卷、一六〇頁)で、ロマンチストの二種類を ADVENTURE のロマンチストと SENTIMENT のロマンチストに分け、現実を拒絶し、夢を超現実のアイデアに追ひ求めるいふロマン性に於て、両者は本質的に精神を一致していると述べている。
- (5) 大西克礼、岩波書店

四

「青猫」的郷愁は、基本的には現実の彼方の「遠い遠い実在への涙ぐましいあこがれ⁷⁾」であるが、その具象的、生動的表象の一つとして「都会」への憧れがあげられる。「定本『青猫』」自序にも示されているように、「都会への郷愁」は、詩集「青猫」の主要モチーフとなっていた。

も一つの別の意味は、集中の詩「青猫」にも現れている如く、都会の空に映る電線の青白いスパークを、大きな青猫のイメージに見てゐるので、当時田舎に居て詩を書いた私が、都会への切ない郷愁を表象してゐる。

詩篇「青猫」、「群衆の中を求めて歩く」及び同期の拾遺詩篇「都会と田舎⁽⁴⁾」等には、主体の切ない都会憧憬の思いが、めんめんと述べられている。

しかし、「青猫」の都会への憧れの背後には、その反作用としての「田舎」(郷里)に対する本能的、生理的な嫌悪感がなまなましく息づいているのを見逃してはなるまい。

(前略) ここには自然がある、／おそろしく大きな手もつけられない自然がある、

田舎のすべてのものの上に、おほひかぶさつてゐる重くるしい陰鬱な自然である、

ああ、自然、／なんとという冷酷な意地のわるい言葉であらう、

ああ、またなんといふ恐ろしさで、／この自然が私の心の上にのりかかってくるであろう、

私のたましひはその重みにくろずみ、／くるしくたへがたく土壌の下にすりなきをするむぐら、⁽⁵⁾のやうだ、(中略)

ああ、じつになんといふ恐ろしさで、／この陰鬱な自然が私にのりかかってくるとか、

みよ、みよ、その鉄板のやうな重たさが、／私のいのちをまっかうから押しつぶし、

か弱い神経の繊維をがりがりとかじりつめる、

ああはやこの恐ろしい自然は私のいのちの骨までもがりがりと食ひ尽す、／食ひ殺す、

(拾遺詩篇「都会と田舎」第二段)

右のテキストにみられる異常なまでの田舎(自然)拒否の感情は、作者の生活環境と、それに伴う心理的要因が強く影を落としている。停滞した「時」と閉鎖的な人間関係から受ける心理的抑圧⁽⁶⁾は、田舎(故郷)の自然に投入され、怪獣の相貌を描かせ、被害妄想的意識と恐怖感をつのらせる一方、都会へのはるかな憧れの思いをかりたて、「都会と田舎」に対する二者択一的感情⁽⁷⁾を促進させたのであらう。彼の内部で固定化された都会対田舎の二元対立的意

識は次の図式に整理できる。

都会（東京↓西欧）―近代文化（自由の象徴）―イデア（幻想）

田舎（前橋↓日本）―封建的後進性、閉鎖的社會の象徴―現実（妄想）

さらに具体的に検討してみると、「ありとあらゆる官能のよろこびとそのなやみと、ありとあらゆる近代の思想とその感情と、およそありとあらゆる『人間的なもの』のいっさいはこの都会の中心にある」というのが観念としての都会の内容であり、「もえあがるやうな大都會の夜景」と「もりあがる群衆」と、「東京大幻想案」^{フアンタジー}が、その表象となっている。

これに反して「田舎」とはどんな所なのか。「ここには文明がない。ここには人間的なるものはなんにもない。」存在するのは、「おそろしく大きな手もつげられない自然」「重くろしい陰鬱な自然」であり、かの「恐ろしい山」⁽⁶⁾「自然の背後に隠れて居る」⁽⁷⁾に示されたやうな、魔物、怪物のやうな不条理的存在である。近代人朔太郎にとって、郷土、自然は本能的、生理的に相容れず、アレルギー反応を起させるものでしかなかった。そして、田舎への拒絶反応が強化するだけ、都会のファンタジーは美しく燃えあがる。当時の朔太郎にとって、「都会」は現実生活の場に残された一つの「ゆめ」であつたのだ。彼自身、自己の求める都会のファンタジーが、「ただ一疋の青い猫のかげ」⁽⁸⁾であり、「われの求めてやまざる幸福の青い影だ」⁽⁹⁾と予感してはいたものの、その「かげ」としてのイデアが必要であつたのだ。かの「裏町の壁にさむくもたれてゐるこのひとのごとき乞食」⁽¹⁰⁾、そのゆめみる存在に、作者は自己の投影を見出したのではなからうか。それは後年の次の如き感想が示している。

人生はふしぎなもので、無限の悲しい思ひやあこがれにみたされてゐる。人はさうした心境から、自分のすがたを自然に映して、

或は現実の環境に、幻想する思ひの中に、それぞれの望ましい地方を求めて、自分の居る景色の中に住んでゐるものだ。(中略) げに人生はふしぎなもので、無限のかなし思ひやあこがれにみたされてゐる。人はその心境をもとめるために、現実にも夢の中にも、はてなき自然の地方を徘徊する。(拾遺詩篇「大井町」全集第一巻)

実に、浪漫主義者朔太郎にとって「都会」はリアルな実在ではなく、「現在^{ザイン}してないもの」「非所有」のイデヤ(幻影)でしかなかった。彼は主観の「かげ」を實在の大都市東京に映して、その「もりあがる」ムードに流されてゆく生のリズムを楽しんでいたのである。しかし、後年、⁽⁴⁾東京定住の宿願が達成され、妻子とともに大井町に移り住み、憧れの「都会」が日常現実となった瞬間にその「青猫のかげ」は消え去っていたのである。

- 註(1) 「青猫」序 (2) 「青猫」大正六年四月、「群衆の中を求めて歩く」「都会と田舎」は大正六年六月発表、全集第一巻所収、伊藤信吉「詩的情操について」朔太郎研究、一四頁
- (4) 境忠一「詩と故郷」桜楓社、二二二頁 (5) 「都会と田舎」より (6)(7) 「青猫」中の詩篇 (8) 詩篇「青猫」
- (9) 同上 (10) 同上 (11) 詩の原理、七三頁 (12) 大正十四年二月

五

「青猫」のヴィジョンには、「月夜」や「仏の見たる幻想の世界」のように、全体のイメージを一つの情緒にとかし込む明るい月夜の幻想を描き出した心象風景もあるが、「薄暮の部屋」「蝶を夢む⁽¹⁾」などのように、全体的形象がうす青い「かげ」に掩われた薄明の世界の幽暗、玄妙な情調が主調となっている。それは意識と無意識の中間層にある、夢と幻想の領域であり、主体の退行的な生意識の美的表象で、主観の「或る縹渺たる象徴的、具象的な觀念⁽²⁾」に属

するものではなからうか。

心理学的解釈によると、夢と幻想とは、環境不適応などによる精神の退行運動の一つで、無意識の要求に適応せんとする傾きを持ち、精神の発達の前期的段階への復帰であるといわれる。即ち夢思考、幻想思考は精神の退行的様相を特色づけるものとして、超個人的衝動の影響が強く、たとえば先祖の精神、古代の層、前世の記憶を辿らうとして夢の中で無意識は、遠い過去に属する未知の精神生活をわれわれの束の間の意識に持ち込もうとするのである。⁽⁵⁾ 詩集『蝶を夢む』の標題となった詩篇「蝶を夢む」は、「たよりない幼な児の魂」に退行した朔太郎の、夢と現実の境界でのしずかでものがなしい情緒を描き出し、先験的生の記憶のよみがえりを示唆している。

蝶を夢む

座敷のなかで大きなあつぱつたい翼^{はば}をひろげる

蝶のちひさな 醜い顔とその長い触手と

紙のやうにひろがる あつぱつたいつばさの重さと。

わたしは白い寢床のなかで眼をさましてゐる。

しづかにわたしは夢の記憶をたどらうとする

夢はあはれにさびしい秋の夕べの物語

水のはとりにしづみゆく落日と

しぜんに腐りゆく古き空家にかんするかなしい物語。

夢をみながら わたしは幼な児のやうに泣いてゐた
たよりのない幼な児の魂が

空家の庭に生える草むらの中で

しめつばいひきがへるのやうに泣いてゐた。

もつともせつない幼な児の感情が

とほい水辺のうすらあかりを恋するやうに思はれた

ながいながい時間のあひだ わたしは夢をみて泣いてゐたやうだ。

あたらしい座敷のなかで 蝶が翼をひろげてゐる

白いあつぱつたい 紙のやうな翼をふるはしてゐる。

この詩篇の主旨は「遠い実在への郷愁」であるが、そのイデオは「とほい水辺のうすらあかり」にほのかに示され、フロイトのいう超自我(エス)の領域、未生以前の遠い先験的記憶のよみがえりを思わせる。それはかの樂園復帰(胎内復帰)への潜在的願望の表象ではなからうか。このような「幼な児の魂」に実存的生の真実を見出した朔太郎は、

「最も原始的な情緒」においても、楽園復帰への願望をゆめのように描き出した。

白昼^{まひる}のかなし思慕から／なにを、だむが追憶したか

原始の情緒は雲のやうで／むげんにいとしい愛のやうで

はるかな記憶の彼岸にうかで／ととらへどころもありはしない。(第一連は省略、傍点は作者による)

この「はるかな記憶の彼岸」にうかんだ「原始の情緒」そのとらへどころもない思慕こそ、「蝶を夢む」の幼な児の、せつない、ものがなしい感傷に通じるものであり、かの「白いあつぽったい紙のやうな翼^{はね}をふるはしてゐる蝶は、その情緒の表象であらう。

しかし、このような先験的記憶にまつわる楽園復帰へのノスタルジャの、縹渺たる、甘美でものがなしい情緒のかけに、同じく先験的記憶にまつわる暗い不安と恐怖の感情がこだまのように呼応し、「青猫」の世界の情緒に陰影^{ニュアンス}を与えている。このような「原始的先験感覚への溯源⁽⁶⁾」のポジティヴとネガティヴな両面の結合は、作者によると、「おのれのたどりついた原始的先験感覚の観念的正当化への試み⁽⁶⁾」というからくりが潜められているのであるが、作者の意図はさておき、「青猫」のロマンティズムが底辺部に暗い実存感をただよわす不協和音的構成を持ち、内的リアリティにみちた恐怖のよび声と、生の原郷へのノスタルジーをよび起こす深い「感情の意味⁽⁶⁾」をもつことに重要性を認めたい。

「遺伝」「鶏」「黒い風琴」「自然の背後に隠れて居る」等は、生の意識下の「原始的先験的恐怖感」をよびます情緒の音楽であり、主体は「魂のおきな児」となって、生の原野で「魂の母」をよび求めて絶叫する。「恋人よ、母上よ」「鶏」「お母ああさん！ お母ああさん！」(「自然の背後に隠れて居る」)。また作者がすぐれた聴覚的構成力によって創造した独自のオノマトペ、「のをあある」とをあある やわあ(「遺伝」)、「とをてくう」とをるもう、とを

るもう」等は、詩的ヴィジョンの主想語となる「純粹の聴覚的音響⁽⁶⁾」であり、これらの、はるか彼方のなにものかに向つてよびあげる切ない「よび声」は作者のユニークな「生」の「思い」の表象として、虚無的存在をみたすべき真の實在へのよびあげとなっている。人間は自己の孤独な実存意識にめざめ、生の根柢の薄弱性を感じたとき、「魂の幼な児」のやるせない思いにかられて、永遠ののすたるぢやのはるかなよび声を魂の内奥に反響させずにはおられないのである。

- 註(1) 萩原朔太郎の第三詩集、大正十二年七月刊、「月に吠える」「青猫」の拾遺詩集
(2) 詩の原理、四〇頁 (3) グロテスクの系譜、アーサー・クレイバラー著、法大出版局、一一五―一二七頁
(4) 安藤靖彦「青猫スタイル覚書」一五〇頁、日本文学研究資料叢書、萩原朔太郎
(5) 同、一五一頁 (6) 詩の原理、六三頁―六七頁 (7) 自作詩自註、全集第五卷、四〇三頁

六

非在のイデヤを求める魂の飛翔、高揚と、自己存在の悲慘さや、現実への無力感、敗北感、このような、無限と有限の間を漂う不安定な情緒のゆれと起伏とは、「青猫」の内的リズムの基調となっているが、特に「愛」のイデヤを対象とする「艶めかしき形而上学⁽⁷⁾」は、情緒の波の激しさ、感情のニュアンスの微妙さ、捉えがたさにおいて、最も重要なモチーフとなっている。

特に「青猫」期の朔太郎にとって、「女性」と「恋愛」とは、「非所有」のイデヤの中心であった。⁽⁸⁾「青猫を書いた頃⁽⁸⁾」には、朔太郎の日常生活の最終的「夢」であった結婚生活への期待もみごとに崩壊し、倦怠、虚無、頹廢のム

ードにのめり込んでいく内的生活の図柄がつぶさに訴えられているが、その失敗の一因として、結婚恋愛に対する彼の「夢」があまりにも現実から遊離していたことがあげられている。しかし、現実でも裏切られた愛のヴィジョンを彼は虚構の世界にみごとに構築したのであった。

元来、恋愛は人間感情の中でも、もっとも抒情的で、個性豊かな表象を持つ営為であり、時空を超えて永遠のボエジの源泉といえよう。まして、ポエジーの本質を音楽的情緒に求め、生涯浪漫的抒情詩観を貫き通した詩人朔太郎にとって、恋愛はひとしお意味深い表象にみちた「感情中の感情」であり、詩的情緒の高揚、飛翔をもたらし最適のモチーフであった。

このようなイデアとしての「女性」あるいは「恋愛」は、「艶めかしき形而上学」の名にふさわしく、無限の憧憬、渴仰をこめて美化され、幻想化されているが、その表象は多様であり、「愛と肉とのさまざまな均衡の段階」を示すものとなっている。これを三好達治は「エロティスム系流」として一括し、「彷徨詩系流」とともに「青猫」の二大系流として位置づけを行ったが、この他に、藤原定氏の試みられた分類もある、これらを参考にし、愛の対象を横軸とし、制作時期を縦軸とする三期の分類を試みた。

第一期 郷土的愛への志向——「永遠の女性」あるいは魂の原イとしての「母なるもの」への思慕（大正六年～七年頃）作品は、「薄暮の部屋」「灰色の道」（蝶）「寝台を求む」「腕のある寝台」（蝶）「強い腕に抱かる」「鶏」等

第二期 エロチスムへの魅惑——両性の全き結合による生の充溢と歓喜への渴仰（大正十年～十一年、ただし、大正六年頃のものもある）作品は、「その手は菓子である」「その矜足は魚である」（蝶）「艶めける靈魂」「花やかなる情緒」「片恋」「夢」「春宵」等

第三期 虚無的情欲の世界——「死」とむつみ合うわびしい情欲の惑溺（大正一二年～一四年頃）作品は、「猫柳」「艶めかしい墓場」「石竹と青猫」（蝶）、「青猫以後」も入れると「猫の死骸」「沼沢地方」等

以上の分類が示すように、初期のマリア思慕的なノスタルジャ詩篇から、第二期の官能的、感覺的な恋愛情緒の世界に移行し、最後は「頽廃官能の生活史の終結⁽⁸⁾」といわれるむなしく荒んだ情欲の世界にのめりこんでいく、この下降的展開過程は、「朔太郎の『宿命』の漸進的自己成就の行程⁽⁹⁾」を示すものとして注目される。が、ここではその多様なモチーフ、表象を通して「愛」のイデヤの本質を追求してみたい。

第一期のノスタルジャ的愛の世界は前章で述べた先験的、原始的情緒への思慕と結びつくので、これを除外し、第二期を中軸とするエロチスム詩篇の、恋愛や性の大胆な肯定、賛美の持つ時代的意義は、「日本の自然主義の赤裸々な自己告白に全く無縁なものとは思えない⁽¹⁰⁾」という指摘が示す如く、その天真爛漫な恋愛情緒の表現は、風紀取締まりの厳しかった当時としてかなり思い切ったものであったと推察される。しかし、日本自然主義の志向した性の解放は、封建道徳、社からの自我の解放であつたのに対し、朔太郎の求めた解放のポイントは、虚構的な詩的表現による情緒世界の領域に止まっていた。作者が詩論で主張したように、現実生活において恋愛の夢に敗北した朔太郎は、純粹の詩美の世界で、「人生の魔術師⁽¹¹⁾」として、至上の恋愛情緒世界を描きだしたのである。

詩人とは、すべての日常的な感情と生活を、楽しく美しいものに変化し、雑音をハーモニーの諧音に変へ、日常性を超現実のイデアに夢みることに於て、彼の熱情とテクニクを持つところの人を言ふのである。即ち言へば、詩人とは「美」への追求者を言ふのである。詩人は最も不幸な境遇に居る時でも、表現に於て常に「悦び」をもち、美の陶醉に溺れることができる。⁽¹²⁾

その表現のポイントは高踏的で生活感の乏しい「冷感⁽¹³⁾」的美を極力排し、「もっと人間性の情線に触れ」「生感感情に深くひびいてくるところの、より意欲的で温感のある美⁽¹⁴⁾」が極力求められた。「青猫」の艶美なエロチスムは、いわば「表現的エロチスム」あるいは「情緒的エロチスム」であると規定できよう。

「青猫」のエロチスム詩篇の主旨は、「あはれな孤独のあこがれきつたいのち⁽⁴⁾」を、「すべてを愛に希望にまかせた心⁽⁵⁾」で、「解きたい夢のNymphに身をまかせて⁽⁶⁾」ただあてもなくながれて行こうとする無目的的生の享樂であつた。それは、作者が歌麿の浮世絵に見出した「エロチズムへの艶めかしき没落⁽⁷⁾」に通う恋愛情緒への全面的惑溺への願望であつた。永遠の浪漫主義者朔太郎にとって、恋愛、女性は、終始「非所有」の夢、幻影であり、情緒の琴線をかき鳴らすかなしくもなまめかしい「音楽」であつた。

- 註(1) 「青猫」序 (2) 中桐雅夫「青猫」萩原朔太郎研究、二六〇頁「女性は彼にとつてとらえ難い一つのイデアであつた」
 (3) 全集第五卷所収 (4) 全集第三卷、恋愛名歌集解題一般、二七五頁 (6) 筑摩叢書萩原朔太郎、一四二頁
 (7) 現代詩鑑賞講座(角川版) 第五卷、三八頁
 (8) 安藤靖彦「青猫」スタイル覚え書「有精堂、日本文学研究資料叢書、萩原朔太郎、一三九頁
 (9) 那珂太郎「萩原朔太郎」角川版、現代文学鑑賞講座、六八頁
 (10) 安藤靖彦「青猫スタイル覚え書」一四八頁 (11) 全集第四卷「詩人の使命」一五一頁
 (12) 同上 (13) 詩の原理、二六頁 (14) 同、五一頁 (15) 「花やかな情緒」 (16) 「春宵」
 (17) 「その襟足は魚である」 (18) 詩の原理、四三頁

七

すでに述べたように、「青猫」の全形象はうす青い「かげ」に掩われて幽暗な情調をただよわしているが、響庭孝男氏によると、それは「光」を失った存在と物質の翳のような「青」、あるいは「月の光」を思わせる「憂鬱な倦怠のユートピアを照し出す色⁽¹⁾」であり、朔太郎が自己の存在を倦怠と死にたとえていることを意味しているのである。

「青猫」末期は、現実的生のすべての夢を喪失した作者が「生」の逃避を企て、「死」のイデアを訪ねてさまよう彷徨詩系統が主流をしめる。その虚無的な、「死」のかげを追う旅の途上で、そのポエジーはエロチスム系統との出会いをとげ、これと合流する。⁽⁸⁾ エロチスム系統の第三期、「艶めかしい墓場」「猫柳」等における虚的情欲の世界はここに開かれた。

しかし、ネガティブな「死」の想念も、ポジティブな面からとらえ直すと、現実的生の彼岸の涅槃の境地―煩惱即菩提の解脱と寂滅為樂の境地⁽⁹⁾―への思慕、郷愁という、宗教的世界につながるものであつて、「青猫」における「死」のヴィジョンも、この両面から把握されなければならない。また哲学的思索を好んだ「思想家」朔太郎の思弁的な「死」の想念をも併せ捉えたと、次の三つのパターンに分類できよう。

一、「死」の神秘的、宗教的把握―「美しき死」涅槃への憧れ

二、「死」の物理的把握―肉体の腐敗と自然的自己解消（物理学上の原素への還元による一切無化の世界⁽¹⁰⁾）

三、「死」の哲学的、思弁的把握―「死」を永遠に停止した「時」としてとらえる。即ち、発展的な歴史、社会から遊離した無意味な「時」の連続。ニイチエの永劫回帰の世界

以下、これらの「死」を代表的な詩篇によつて具体的に検討したい。

1、宗教的、神秘的な「死」への思いは、もつとも情緒的な詩的世界であり、「不死の幻想」「美しき死⁽¹¹⁾」への誘惑は、「或るプラトンのイデア―魂の永遠なる故郷―へののすたるぢや⁽¹²⁾」として、浪漫的な詩情を甘美に誘うものである。その超越的、永遠的な「思慕の夢みる実在⁽¹³⁾」への郷愁は、主体の孤独感、虚無感をつつこみ、縹渺たる気分にかしこむ蒼白い月の光にも似た情緒の世界である。

「宗教」は若き日の作者のオアシスであつた。「月は吠える」の初期、浄罪詩篇期⁽¹⁴⁾に、生の実存的苦悩からの救い

をキリスト教に求め、浄罪を希求したその真摯な求道心は、当時の作者の手記、書簡等に詳しく述べられている。⁽⁹⁾しかし、「青猫」期前後から朔太郎の生意識は下降、頽廢の道程を辿り、「全く疲労の椅子に身を投げ出したデカダンスの悲哀」(意志を否定した虚無の悲哀⁽¹⁰⁾)に身をゆだねるとともに、かの純粹で熾烈な求道的姿勢はくずれ去ったかの感がある。即ち「宗教」は詩の表現素材として「意匠」化⁽¹¹⁾され、情調化されて「青猫」倦怠のムードに溶解されてしまった朔太郎の主觀の「かげ」の下、仏教の深遠で高邁な思想、道德も「情味の深い影を帯びた神韻縹渺たる音楽⁽¹²⁾」にとけこんでしまったのである。

涅槃は熱帯の夜明けにひらく

巨大の美しい蓮華の花か

ふしぎな幻想のまりらや熱か

わたしは宗教の秘密をおそれる

ああかの神秘なるひとつのいめえち「美しき死」への誘惑。

涅槃は媚薬の夢にもよほす

ふしぎな淫欲の悶えのやうで

それらのなまめかしい救世⁽¹³⁾の情緒は

春の夜に聴く笛のやうだ。

(「涅槃」「蝶を夢む」より第三、四連)

ここには、内部の密室にかくれ冥想する中に、現実の生への意志を否定し、ひたすら彼岸のイデア「涅槃」への思慕、郷愁を誘われる朔太郎のゆめが幻想的に描かれている。

「仏の見たる幻想の世界」も、同じく「艶冶な仏」が表われ、

そのひとの瞳孔⁽¹⁴⁾にうつる不死の幻想／あかるくてらされ

またさびしく消えさりゆく夢想の幸福とその怪しげなるかげかたち

(「仏の見たる幻想の世界」第一連より)

が、妖艶な蓮の花弁に託して描かれるが、その表象は花やかで孤独な月光に包みこまれ、寄せては返す波のようなりづムに乗って情緒の音楽を美しく奏でるのである。

この両者の神秘的、幻想的なムードは、まさに「媚薬の夢」であり、意志の喪失と魂の死に誘い込まれる危険を冒して自ら進んで「美しき死」への誘惑に身をゆだねる「蛾虫の運命」⁽⁴⁾を思わせる。この「美しき死」への幻想こそ陶酔的な音楽情緒の極致であり、浪漫主義者の桃源境であつたといえよう。しかし、その幻想も究極は「かけ」にすぎないことを作者は軸めた意識で捉えていた。彼はこの「不死の幻想」や「美しき死」のイデヤに永く止まることができず、真のイデヤの影を求めて再び彷徨するのである。

2、エロチスム系流の第二期の「艶めかしい墓場」「くづれる肉体」は、「死」のグロテスクな心象と頹廢的なエロチシズムが結びついたユニークな形象である。作者はこれらのイメージについて、

肉体の自然に解消して行く死の世界と、意志の寂滅する涅槃への郷愁を切なく歌った。（「艶めかしい墓場」について）

ショーペンハウエルの涅槃の佗しくやるせない無常感を、印度の蛇使ひが吹く笛にたとへて、郷愁のリリックで低く歌った。

（中略）肉体の自然的に解消して物理学上の原素に還元し、一切の無に化してしまふことを願って居た。（「くづれる肉体」について）（以上は「青猫を書いた頃」より）

と解説している。しかし、これらのヴィジョンの印象は涅槃への郷愁というよりは、むしろグロテスクな心象効果が強烈であり、その内的リアリティは、肉体の崩壊感覚、「死」とむつみ合うさびしく青ざめた情慾、愛慾にまつわる暗い恐れ of 三者に求められるであろう。右の、肉体の腐敗と崩壊、無への還元のイメージは、すでに「月に吠える」の中期、「くさった蛤」の章の軟体動物的イメージ（「春夜」「くさった蛤」）や、織毛のヴィジョン（「ありあけ」「鼠の巢」）等に前兆を見出すことができる。

「わたしの生命や肉体がくさってゆく」という暗く不気味な幻想は、人体が素材となつていただけに、より直接的であり、「深い深い絶望の嗟嘆と、人間の心のどん底からにじみ出た恐ろしい深酷なセンチメンタリズム」⁽⁴⁾を感じさ

せる。これらの虚構的、想像的なヴィジョンの背後に、作者の深い虚無感がぼっかりと口を開いていたことを忘れてはなるまい。

3、「青猫」の主要なモチーフであった「都会」への憧れの背後に「田舎」(郷土)への根づよい嫌悪、恐怖が働きかけていることを既に述べたが、その要因の一つとして、「田舎」における永遠の「時」の停止があげられる。⁴⁴それは進歩、発展から完全に遮断されたニイチエ的永劫回帰の「時」の感覚である。

げに田舎に於ては、自然と共に悠々実在してゐる、ただ一の永遠な「時間」がある。そこには過去もなく、現在もなく、未来もない。(中略)昼も、夜も、昔も、今も、その同じ農夫の生活が、無限に単調につづいてゐる。

このような「時」の停止に朔太郎は精神的「死」を感受し、進歩と「生」のシンボルである「都会」への脱出を渴望したのであった。

しかし、「青猫」末期に至り、虚無感、絶望感が深まりゆくにつれ、自ら「時」を遮断した彼岸の生を求める彷徨をはじめたのである。「青猫」末期の作品として、「怠惰の暦」「輪廻と転生」の如き彷徨詩篇が数篇みられるが、『青猫』以後の世界は「風船乗りの夢」「古風な展覧会」「沿海地方」等、現実の彼方の「ばうばう」たる心象風景での彷徨が中心的モチーフとなっている。そこには、音響なく、遠近感なく、重力なく、あらゆる地上的関係を裁ち切った不思議なパノラマの世界が、ゆっくりとしたテンポで、高速度撮影のフィルムのように展開する。

夏草のしげる叢から／ふはりふはり天上さして昇りゆく風船よ／
籠には旧暦の暦をのせ／はるか子午線を越えて吹かれて行かうよ。／

ばうばうとした虚無の中を／雲はさびしげに流れて行き／
草地も見えず記憶の時計もぜんまいがとけてしまった。

〔風船乗りの夢〕

(前略) さうして西曆一八一〇の仏国巴里市を見せるパノラマ館の裏口から

人の知らない秘密の抜穴「時」の胎内へもぐり込んだ。／ああこの消亡をだれか知るか？

円頂塔の上に円頂塔が重なり／無版にはるかな地平の空で／日ざしは悲しげにただよつてゐる。〔古風な展覧会〕

永世輪廻や永劫回帰は仏教、あるいはニイチエの思想に基づく形而上的思念であるが、朔太郎はこれをネガティヴな虚無的心情によって情緒的にうけとめ、未来永劫の閉された「死」の表象として形象化した。それは、歴史、社会という現実の重圧や関係を遮断した「ふしぎな宇宙のはて」への逃避行の「ゆめ」であり、彼の主観がつくりあげた見事なヴィジョンであつた。

「青猫」のロマンチズムの特質は、一言で表せば、作者の「主観の掲げるイデア^④」思慕であるといえよう。彼は生まれながらの浪漫的詩人であり、その強い内面的集中性は、現実社会から完全に隔絶した独自の宇宙を内面に形成した。いわば「私自身の宇宙^④」を自我意識の内部に構築し、そこに「或る縹渺たる象徴的、具象的な観念^⑤」を導き入れた。彼のイデアは、形而上的性格を持つが、それは主観性の強い「個人的なメタフィジック^⑥」であり、「艶めかしき形而上学」の名に相当するものであつた。かの、人目をしので恋人の屍体とむしく戯れた青猫^⑦のように、自我の主観が生み育てた幻想のイデアと戯れ、悲哀の情緒にナルシスティックな涙を染しんでいたともいえよう。詩集「青猫」は、主観的イデアリストであり、生まれながらのロマンチストであつた抒情詩人朔太郎の、ゆめと幻想から生まれ出た音楽的抒情詩集の傑作であつた。

註(1) 「反近代と抒情」ユリイカ四巻五号、八四頁 (2) 三好達治「萩原朔太郎」筑摩叢書、一四二頁

(3) 定本「青猫」自序

(4) 「青猫を書いた頃」全集第四巻、七〇頁

(5) 「仏の見たる幻想の世界」と「涅槃」

(6) 詩の原理、四五頁

(7) 同上

(8) 大正三年十二月から四年三月頃

- (9) 佐藤泰正「近代詩とキリスト教」新教出版社、中の「朔太郎と墓鳥」参照 (10) 定本「青猫」自序
(11) 「思想は一つの意匠であるか」 (12) 詩の原理、六六頁 (13) 「青猫」序
(14) 全集第一巻「故田中栄吉氏の芸術に就いて」一一四頁 (15) 「田舎の時計」(散文詩集「宿命」) (16) 詩の原理、三九頁
(17) 「猫町」全集第二巻、五四—二頁 (18) 清岡卓行「恋愛詩のメタフィジックをめぐって」思潮社、現代詩大系、五巻九五頁
(19) 「石竹と青猫」(「蝶を夢む」所収)

主要参考文献

- 萩原朔太郎全集 第一巻〜第五巻 新潮社 室生犀星・三好達治・伊藤信吉編
萩原朔太郎 筑摩書房 三好達治
詩の原理 新潮文庫 萩原朔太郎
萩原朔太郎 角川書店 近代文学鑑賞講座 十五巻
萩原朔太郎 有精堂 日本文学研究資料叢書